

ハマに職人あり

横浜焼

開港後、全国から選りすぐりの陶工たちが横浜に集結した。舶来品に刺激を受け、この横浜で作られた焼き物は「横浜焼」と称され、品質と美術性で欧米から高い評価を受けた。しかし、震災や空襲で窯は消え、横浜焼の文化は途絶えた。それを45年ほど前によみがえらせたのが横濱増田窯だ。



右：イヤープレート、2011年の絵柄は「横浜名勝 内田町よりステーション之圖」(1万8900円)。手前はガス灯を描いたイヤーコレクションプレート(6300円)。下：奥に窯の火が見える。色によって温度や時間が異なる

和と洋を融合する。横浜らしさを表現した器

1色1色に手間ひまかけて鮮やかな彩りを追求する

「横浜の街自体が“和と洋の融合”で成り立っていますね。器も同様に、和洋両方のいいところを取り入れ、“横浜らしさ”を表現したいんです」と、横濱増田窯2代目で、職人でもある増田博一さん。

工房を訪ねると、トンネル状の窯から、焼きあがった皿が列を成して出てくるころだった(右写真)。「この瞬間は感無量です。キラキラと光りながら、窯から出てくる器は、苦勞の結晶ですからね」と増田さん。現在、20人ほどの職人が、絵柄のデザイン、絵付け、焼成などの工程を分業している。およそ2週間から1か月ほど、職人から職人へ、さまざまな工程を経て、1作品が完成する。

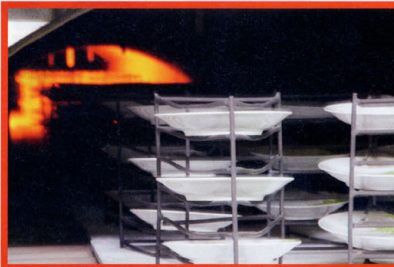
絵付けには「デカルコマニア」という転写技法が使われる。デザイン画を1色ずつ手作業で紙(転写紙)に印刷し、これを器にぴったりと貼って絵柄を写し取る方法だ。

転写紙への印刷には、多色刷り版画をさらに精緻にした技術が必要とされる。例えば、一口に青といっても、薄いもの、濃いもの、明るめ、暗め…と、それぞれ作った1版1版に顔料を載せていく。調べた顔料と焼き上がりの色は全然違うので、焼いてみるとわからない。壁には、これまでに作りためた色見本が並んでいた。その色数は軽く1万を超えるという。

もう一つ、それぞれの版がずれないように1枚の転写紙に印刷するのも熟練の業だ。「湿度や気温で、版がずれるんです。湿度が5%違うだけで紙が1~2mm動く。毎日天気予報や湿度計とにらめっこですね」と転写紙担当の職人さん。以前、色数が30版もある器に取り組んだときを振り返りながら、「いやー、あれは大変だった」と笑う顔は、とても誇らしげだ。

毎年11月、文明開化の横浜を描いた「イヤープレート」を発売する。これに使われる青色が、横濱増田窯が独自に調査・開発した「ヨコハマブルー」だ。“和の青”・呉須と、“洋の青”・コバルトブルーの中間をとった“和と洋の融合”。1200度以上でしか発色しない独特の深みのある青は、多くの人々を魅了している。

増田さんは言う。「横浜焼の歴史は、たかだか150年。現在進行形、発展途上です。僕たちが今、その歴史を作っているという気概で、“横浜らしい”器を作り続けたいですね」



●横濱増田窯 代表取締役 職人 増田博一さん

●横濱増田窯 代表取締役 職人 増田博一さん
気に入った器があったら、ぜひ一度使ってみてください。器が変わると、作る料理が変わったり、友達を呼ぶようになったり、生活も変わるといいます。

●横濱増田窯本店「代官坂元町アントギャラリー」
横浜市中央区元町2-108
TEL.045-663-2228
月曜(祝日の場合は翌日)休み
<http://www.masuda-art.com>